

泉 孝英 著

## 『外地の医学校』

歴史・社会研究におけるいわゆる「帝国」研究のブームの中で、戦前日本の植民地支配に関わるさまざまな研究が公にされてきている。その中で医史学研究においてはその種の研究動向は必ずしも活発ではなかった。しかし、今般、戦前日本植民地の医学史研究において不可欠な力作がものされた。「外地の医学校」、いまではその存在すら一般ではほとんど知る人もいない医育機関の存在を克明に調べたのが、その標題通りの本書である。著者の泉孝英は、京都大学医学部で呼吸器内科の教授を務め、現在は京都大学名誉教授、財団法人京都健康管理研究会中央診療所理事長の職にある。

本書の構成は、「第1章 台湾の医学校」「第2章 朝鮮の医学校」「第3章 樺太の医学校」「第4章 満州・関東州の医学校」「第5章 中国占領地域の医学校」「第6章 南方占領地域の医学校」「第7章 戦後処理」「資料1 外地の医学校で医学教育に携わった人々」「資料2 外地の医学校の卒業生」の全7章と資料2編からなる。

各章の構成は、おおむね日本の当該地域の支配の経緯、当該地域の衛生医療事情（人口構成、医事行政、医療機関、医師、研究機関、伝染病（感染症）の状況、地方病などの項目について概説された後に、当該地域の医学校・医大、医育機関について、設立順に校史を略述し、歴代校長・学長・学部長ならびに各基礎講座、臨床各科の教授を赴任順にその出身校および任官年月、昇任事歴、戦後の主たる職歴を記述している。

これまで、外地の医育機関としては、台北、京城の両帝国大学の医学部と満州医科大学などは知られた存在であったが、本書はその前身の医学校の経緯や朝鮮についていえば各道立の医学専門学校、樺太の樺太庁立医学専門学校、さらには南方占領地域のジャカルタ医科大学にいたるまで、その存在さえ迂闊に見過ごしてしまいかねない医育

機関の歴史を丹念に追っている。しかも、それらの医育機関に勤務した教員の履歴事項を可能な限り調べ掲載している点は本書の資料的価値をさらに高めるものとなっている。しかも圧巻は、本編で記載した事項を一部再掲しているが、それら医育機関の教員の生年月日、専攻、出身学校、勤務歴、戦後の履歴、業績、表彰事項、姻戚関係、主著などを可能な限り調査し、掲載している資料である。この本編での歴代教員記録と資料での履歴事項をつきあわせることによって、外地の医学校には近代・現代の日本医学史を飾る著名な医学者たちが想像以上に外地の医育に携わっていたことが明らかになる。順天堂院長であった佐藤進（大韓病院）、赤痢菌の発見者志賀潔（京城帝大医学部長・総長）、太田正雄（木下柰太郎、南満医学堂）、発汗研究の第一人者で文化勲章受章者の久野寧（満州医大）、心臓外科の榊原任（同仁会大学医学院）、社会医学の曾田長宗（台北帝大）など多くの医学者が外地の医育機関で教鞭をとったことがわかる。また、水俣病病理の第一人者であった武内忠男やがん疫学の平山雄が満州医科大学の卒業生であったことは本書の資料2で評者ははじめて知ったのである。

本書の著述のもととなったのは、各大学の年史や病院史あるいは学会史である。いわゆる記念事業的に刊行されることが多い大学年史類がその分析のしかたによってはこのような資料的価値の高い著作になる要素を多分に含んでいることは本書に接して改めて感じ入ったことの一つである。

「外地」または植民地日本の何かを語る時、日本人は自省的に多くのことを語ることを控える心性がある。しかし、台湾領有から終戦までに展開した日本の外地における医学研究は熱帯医学研究をはじめとして客観的に歴史的評価が待たれる研究を残してきたし、何よりもその地の日常の医療をささえた足跡がある。そのことを含めて、静か

にしかし厳しく歴史を検討する時期にきているといえる。本書はそのためにきわめて有益な海図を提供してくれる労作であることは言をまたない。

(瀧澤 利行)

[メディカルレビュー社、〒541-0045 大阪市中央区道修町1-5-18 朝日生命道修町ビル、TEL. 06 (6223) 1468、2009年11月、A5判、308頁、3,800円+税]

ミュリエル・ラアリー 著

濱中淑彦 監訳

## 『中世の狂気 十一～十三世紀』

本書は、日本語で読むことができる西欧の精神医学の歴史・狂気の歴史の大きなギャップであった「中世」という空白を埋めることになる画期的な書物である。日本語で読める翻訳ものの西洋の精神医学の歴史は近年充実してきた。全体的な通史として、古いが詳細なジルボグ『医学的心理学史』、短い新しいロイ・ポーター『狂気』がある。それぞれの大きな時代区分については、古典古代にサイモン・ベネット『ギリシア文明と狂気』、初期近代にミシェル・フーコー『狂気の歴史』、近代以降にエドワード・ショーター『精神医学の歴史』と、中世以外は一通り読むことができる状況だったが、中世の狂気・精神医学について日本語で読むことができる詳しい良書が存在しなかった。その空白を埋めたのが本書である。

本書を監訳した濱中淑彦は、シッパーゲス『中世の医学』『中世の患者』（いずれも人文書院）のような百科全書的で重厚な書物を訳してきた。これらはいずれも常に傍らに置いてレファレンスのように使われるものだという特徴を持っているが、この新しい訳業も同じような性格を持っている。本書は、中世の狂気をあらゆる側面から詳細にリサーチし、それぞれの章に各200程度の文献注がついている、本格的な百科全書的な研究書である。膨大な情報が語られているにもかかわらず、本書が無味乾燥に感じられないのは、史実の本質を伝えるような引用を選択してそれを生き生きと描き出す歴史学者の確かな手さばきが冴えていること、章立てが論理的な構造を持っているから

である。

本書は九章から構成されているが、中世における狂気の理解を論じた第一部と、中世が狂気に対してどのような行動をしたかという第二部に分かれている。第一部は、宇宙論的・宗教的な思想の中での狂気の理解を論じた第一章・第二章・第三章と、自然的・人間的な思想の中での狂気の理解を論じた第四章・第五章に分けられている。第一・第二章では狂気を悪魔に憑かれたと解釈する思想と、狂気は罪を犯したため神の罰として陥ったのであると解釈する思想が取り上げられて分析され、第三章では、そのようなネガティブな考えと併存する形で、狂人は神により近い存在であるとする「聖なる狂気」の思想が論じられる。すなわち、狂気を神と悪魔に関係づけて論じる枠組みの中でも、中世の狂気は善と悪、神と悪魔の両義性を持っている。

この第一部の前半を占める宇宙論的な解釈に対比されているのが、第一部後半の自然的・人間的な理解の説明である。第四章では医学書が中心的に扱われ、中世の医学書が持っていた狂気の疾病概念が分析される。理論は主として体液論であり、アラビアから再移入されたガレニズムが中心である。疾病概念としては、フレネジー、マニー、メランコリーに加えて、レタルジー（倦怠）も加えられている。第五章では、トリスタンや円卓の騎士のイーウェンやランスロットなどが活躍する騎士道の恋愛物語を取り上げて、愛が人を狂乱に導く描写、狂人のふりをする描写などが分析さ